

二ノ丸と三ノ丸、西外郭における武家屋敷地の変遷

—福井城下の武家地の研究 その12—

伊豆蔵 庫喜*

The change of the samurai's premises in *Ninomaru and Sannomaru, Nishi-Gaikaku*

—A study on the samurai's premise of the Fukui castle town, part12—

Kouki IZUKURA

This paper considers the change of the samurai's premises in *Ninomaru and Sannomaru, Nishi-Gaikaku* referring to the 'FUKUI ZOUKA-EZU'. The allotment of the premises in *Ninomaru* and the *Nishi-Gaikaku* had not changed through the Edo era, however, had changed twice greatly from Kanbun9 years to Jokyo2, and from Keicho18 years to Manji2 years in *Sannomaru*. As for premises substitute, many residents had replaced with three divisions just after a big fire of Kanbun9 years and in case of the feudal lord change of the Kanei first year. In the late of Edo period, the most of the samurai's premises had occupied by site of the castle.

1. はじめに

本研究は、武家屋敷地の屋敷割や居住者がわかる主な城下絵図8図¹⁾を用いて、江戸初期から幕末までの武家屋敷地の変遷について検討する。すでに福井城本丸の南側にある南三ノ丸(下馬門前・漆門内)と東側の東三ノ丸における屋敷割の変化や屋敷替えについて報告した²⁾。その結果、南三ノ丸は慶長18年(1613)～万治2年(1659)の大火前までに屋敷割は大きく変わり、居住者はすべて入れ替わっていた。その後、南三ノ丸は寛文9年(1669)の大火³⁾や貞享3年(1686)の大法⁴⁾の影響とみられる屋敷替えが多く、正徳4年(1714)以降は武家屋敷地の中に評定所や勘定所など藩の役所が設けられた。一方、東三ノ丸の屋敷割は慶長期から元治元年(1864)に屋形が設置⁵⁾されるまでほとんど変化していない。しかし、屋敷替えは江戸時代を通して頻繁にあり、特に寛永元年(1624)の忠昌入部⁶⁾直後と元治元年の屋形設置前に多くみられることなどを指摘した。

本稿は同じ城下絵図を用いて、本丸を囲む二ノ丸と三ノ丸、西側の外郭(以下、西外郭とする)における武家屋敷地の変遷について考察する。なお、本稿で扱う南三ノ丸は下馬門の内側の武家屋敷地を指している⁷⁾。

2. 城下絵図にみる二ノ丸と三ノ丸、西外郭

8図にみられる二ノ丸と三ノ丸、西外郭の武家屋敷地の様子を巻末に示した(図4-1～8)。これらの絵図に記されている各屋敷地の居住者や藩役所を年代別にまとめたものが表1であり、8図の中で最古の『北之庄城郭図』の屋敷割を書き起したものが図1である⁸⁾。なお、図1に記した屋敷地の番号は筆者が便宜上付けたもので、表1の屋敷地番号はこれに対応している。

* 建設工学科建築学専攻

表1 各時代における武家屋敷地の居住者と藩役所（二ノ丸と三ノ丸、西外郭）

郭名	区画	屋敷地番号	年代								
			慶長18年 (1613)	坪数 (坪)	万治 2年(大火前) (1659)	寛文年間(大火前) (1661～72)	貞享 2年 (1685)	正徳 4年 (1714)	安永 4年 (1775)	文化 8年 (1811)	慶応年間 (1865～67)
二ノ丸	北	NN-1	杉浦六右衛門	459	御接木島	御接木島	御花畑	御花壇			
		NN-2	(雑用蔵屋敷)	720	御接木島 (御作事小屋)	丹波三郎右衛門 本屋敷 (御作事小屋)	(御茶屋)				
	東	EN-1	長松院様	1900			(御作事所)	(御作事所)	(元作事)	(元作事)	花島
三ノ丸	南	SS-1	(御城代) 本多七左衛門		酒井与三左衛門	酒井与三左衛門	稲垣安右衛門	天方五郎左衛門	嶋田清左衛門	松原	北川亘之助
	西	WS-1	小栗美作	1169	加藤内膳	毛受太右衛門	有賀左衛門	本多民部	(用屋敷)	(御用屋敷)	(御用屋敷)
		WS-2	長谷川筑後	344	毛受小三郎	毛受小三郎	(御座所)	(御座所)	(座所)	(御座所)	(御座所)
		WS-3	鈴木勘々由	240							
		WS-4	小川善左衛門	144							
		WS-5	五条茂左衛門								
		WS-6	窪寺善兵衛	210							
	北	NS-1	菅沼休也	900	原左衛門	原平左衛門	永見治郎右衛門	永見治郎右衛門	天方数馬	水谷	水谷半蔵
		NS-2	(御蔵部屋) 小栗忠八	799	大谷助六	大谷助六	泉蔵院	唯識院	■■院	泉蔵院	
		NS-3	片桐丹波	924		大関助左衛門	(仏殿)	(仏殿)	(御仏殿)		(御仏殿)
		NS-4	山崎主膳	555	(御蔵部屋)	(御蔵部屋)	(御蔵部屋)	(御蔵部屋)		(蔵部屋)	
		NS-5	小寺図書	675	大関助左衛門	長崎平右衛門	岸五郎左衛門	岸五郎左衛門 ^{*4}			
		NS-6	永見宮内	705	長崎市之丞	長崎市新左衛門	津田市蔵	数賀山彦右衛門 ^{*4}			
外郭	西	WG-1	出羽様 土佐様	378	恒岡八右衛門	恒岡八右衛門	平岡三郎兵衛	花島	花島		(御作事)
	WG-2	出羽様 御袋	720	斎藤民部		(評定所)	(豊姫様御部屋)	(作事)			

*1: 慶長18年の坪数は、絵図にある間口・奥行の寸法から算出した。

*2: 空欄は空き地、網かけは付紙の剥がれを示している。

*3: 太字は高知席、太字(斜め字)は寄合席を示している。

*4: 安永4年の「岸五郎左衛門」と「数賀山彦右衛門」の付紙は、他とは異筆である。

*5: ()内は藩の役所などを示している。

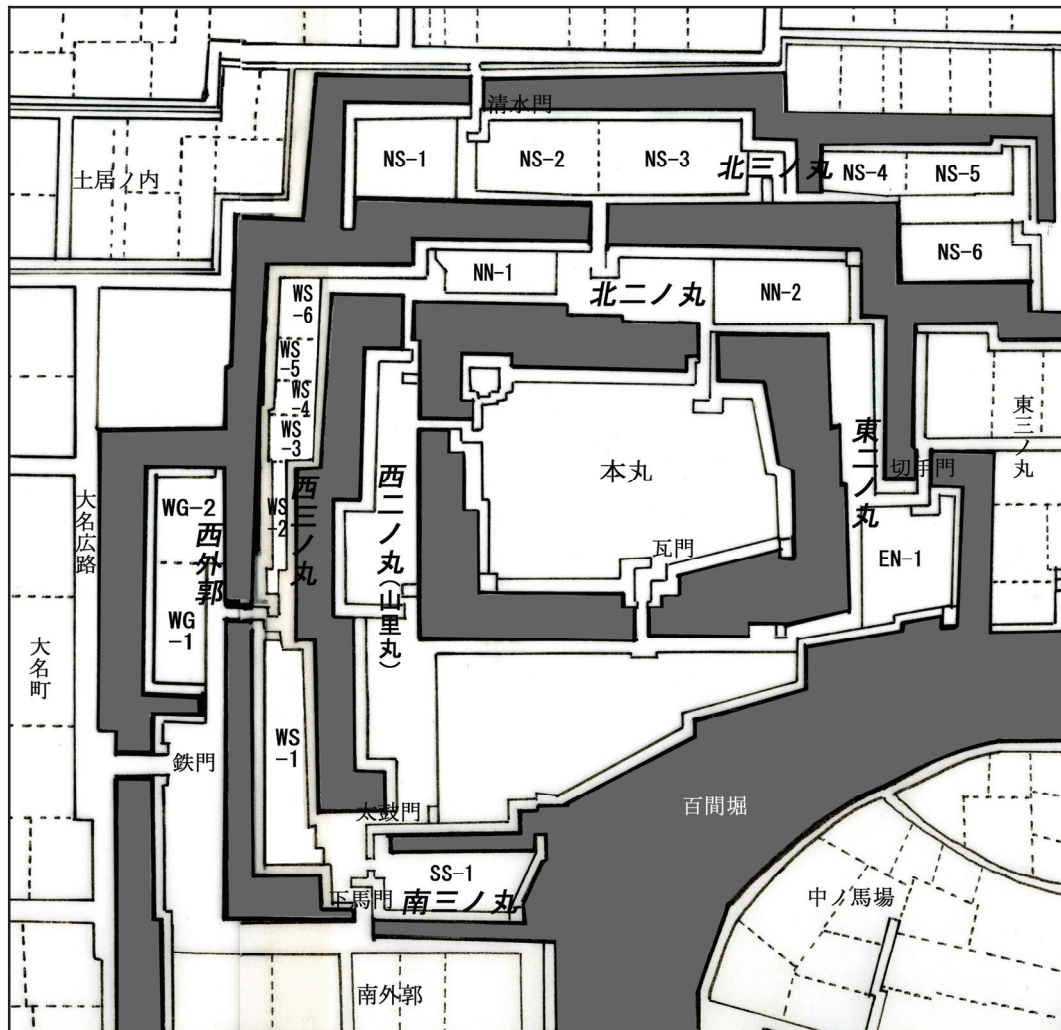


図1 慶長18年頃の二ノ丸と三ノ丸、西外郭の屋敷割

2-1. 慶長 18 年以前 (図 4-1)

慶長 18 年頃の屋敷地 18 筆は、大別すると二ノ丸が 3 筆、三ノ丸は 13 筆で最も多く、西外郭が 2 筆である(表 1 参照)。

二ノ丸の 3 筆は、北二ノ丸の NN-1 に杉浦六右衛門と NN-2 に藩の雑用蔵屋敷があり、東二ノ丸の EN-1 は藩祖秀康の母、長松院の屋敷である。二ノ丸においては藩士の屋敷地は NN-1 (杉浦六右衛門)の 1 筆だけである。

これに対して、三ノ丸の 13 筆はすべて武家の屋敷地である。このうち西三ノ丸の WS-1 と WS-2 の両屋敷地は、秀康の結城時代からの家臣である小栗美作と長谷川筑後に与えられている。

南三ノ丸の SS-1 に「御城代 本多七左衛門」、北三ノ丸の NS-2 に「御鷹部屋 小栗忠八」とあり、この 2 筆はそれぞれ城代屋敷と御鷹部屋とみてよい。また、SS-1 の本多七左衛門は寛永元年に 2 代忠直の嫡男仙千代(光長)に伴い越後高田へ移っている⁹⁾。

西外郭にある 2 筆は、WG-1 が 3 代忠昌の弟直政と、WS-2 がその母(駒の方)の屋敷地である。なお、直政は寛永 12 年(1635)に信濃松本に移封し、さらに同 17 年(1640)には出雲松江に封ぜられ松江藩の始祖になっている¹⁰⁾。

2-2. 万治 2 年大火以前 (図 4-2)

万治 2 年の大火前の屋敷割を示す図 4-2 をみると、屋敷地は 15 筆で慶長期より 3 筆減少している。これは慶長 18 年以降、西三ノ丸の WS-2 と WS-3 が合筆して毛受小三郎に与えられたほか、北三ノ丸の NS-2 と NS-3 が大谷助六になるなど 4 例の合筆および北二ノ丸の NN-2 と北三ノ丸の NS-4 の 2 例が分筆したためである。

居住者は、慶長 18 年～万治 2 年の大火前までに 15 筆すべて入れ替わっている。特に二ノ丸の変化が激しく、北二ノ丸の NN-1 と NN-2 がそれぞれ御接木畠と御作事小屋に替わり、東二ノ丸の EN-1(長松院)は空き地になっている。この他、西三ノ丸の WS-4～6 は合筆で武家屋敷地から御花畠に、西外郭の WG-1 と WG-2 は直政母子から斉藤民部の屋敷地になり、北三ノ丸の NS-2 にあった御鷹部屋は同じ北三ノ丸内の NS-4 に移転している。

2-3. 寛文 9 年大火以前 (図 4-3)

万治 2 年の大火後の福井城下は、本丸の西北にあった寺院を城下北端部に移転させ、その跡地が町人地になるなど大きく変わっている¹¹⁾。しかし、二ノ丸と三ノ丸、西外郭の屋敷割は、先の万治 2 年の大火前に合筆した北三ノ丸の NS-2 が再び分筆した以外、ほとんど変わっていない。

屋敷替えは 16 筆中 3 件ある。万治 2 年の大火前に御接木畠になった北二ノ丸の NN-2 が丹波三郎右衛門になったほか、北三ノ丸の NS-4 にいた大関助左衛門が屋敷割されて成立した NS-3 に転居している。また、万治 2 年時に西外郭の WG-1 にいた斉藤民部は、『稿本福井市史(上)』¹²⁾に「正保二年八月一日、忠昌江戸浅草の邸に薨去、享年四十九、(中略)、斎藤民部、鈴木多宮、瀧主計、太田三弥、山本左門、水野小刑部殉死す。」とあり、正保 2 年(1645)の忠昌薨去の際に殉死している。そして、寛文年間の絵図でもここに名前がないことから、西外郭の WG-1 は正保 2 年～寛文年間の間は空き地のままであった可能性が高い。

2-4. 貞享2年（図4-4）

寛文9年の大火後～貞享2年(1685)にかけても、福井城下の屋敷割に大きな変化がみられる。例えば、百間堀沿いの中ノ馬場にあった武家屋敷地を城ノ橋町や勝見町に移し、その跡地は火除け地として菜園地になっている¹³⁾。ところが、二ノ丸と三ノ丸、西外郭においては北二ノ丸のNN-2と西三ノ丸のWS-2～6が合筆した2例と、北三ノ丸のNS-2が分筆した例がある程度で、先の寛文9年の大火前の屋敷割とほとんど同じである。

屋敷替えは14件あり、寛文9年の大火後の翌10年(1670)に土居ノ内にあった東照宮(図2－左中央)が、北三ノ丸のNS-3(図3－右下)に移築されている。また、合筆した2例のうち西三ノ丸のWS-2～6は延宝4年(1676)に御座所が新設され¹⁴⁾、北二ノ丸のNN-2は丹波三郎右衛門から御茶屋に替わり、正保2年以降空き地であった前述の西外郭のWG-1は評定所になっている。これらのほとんどは藩の役所や役宅、御座所などに替わった事例である。貞享2年時において二ノ丸と三ノ丸、西外郭にあった武家屋敷地は6筆に減っている。



図2 寛文9年の大火前の東照宮の位置
『御城下絵図』(図4-3)の部分図



図3 貞享2年時の東照宮の位置
『福居御城下絵図』(図4-4)の部分図

2-5. 正徳4年（図4-5）

正徳4年(1714)の屋敷地15筆は、貞享2年時と変わっていない。しかし、先の貞享2年までに御茶屋になっていたNN-2は空き地になり、南三ノ丸のSS-1の城代屋敷は稲垣安右衛門から天方五郎左衛門に替わり、西外郭のWG-1は評定所から7代吉品(5代昌親再勤)の娘豊姫¹⁵⁾の屋敷になるなど7件が入れ替わっている。

2-6. 安永4年（図4-6）

安永4年(1775)においても屋敷割は正徳4年とほぼ同じであるが、後掲の図4-6は居住者を示す付紙が剥がれている屋敷地が多い。付箋がない状況は二ノ丸と三ノ丸、西外郭においても同じである。居住者が判明するものでは、南三ノ丸の城代屋敷SS-1が天方五郎左衛門から嶋田清左衛門に、北三ノ丸のNS-1が永見治郎右衛門から天方数馬に替わっているほか、貞享2年時に東二ノ丸のEN-1にあった作事所は西外郭のWG-1に移転するなど屋敷替えは5件みられる。なかでも、西三ノ丸のWS-1が本多民部から藩の御用屋敷に替わったことから、武家屋敷地は先の正徳4年よりもさらに減少している。

正徳4年～安永4年にかけては武家屋敷地が藩役所や御座所に替わる屋敷地が多くなること、安永4年までに二ノ丸の屋敷地はすべて空き地になっていることなどが指摘できる。

2-7. 文化8年（図4-7）

文化8年(1811)の絵図にある屋敷地は13筆である。安永4年～文化8年の間に合筆が2例あったために、先の安永4年時より2筆減少している。

この間の屋敷替えは3件で南三ノ丸のSS-1が松原家に、北三ノ丸のNS-1が水谷家に替わり、北二ノ丸のNN-1～2や東二ノ丸のEN-1など6筆が空き地になっている。この頃から北三ノ丸の東端の屋敷地は空き地になる例が多くなり、この状況は幕末まで続いている。南三ノ丸のSS-1の城代屋敷を除けば、武家屋敷地は北三ノ丸のNS-1の水谷家のみで、文化8年以降は藩の役所などを含む城地が占める割合が大きくなる傾向が窺える。

2-8. 慶応年間（図4-8）

慶応年間(1865～67)の屋敷地は15筆で、文化8年時より2筆増えている。これは北三ノ丸のNS-2とNS-4が再び分筆したことによる。

屋敷替えは南三ノ丸のSS-1が松原家から北川亘之助に替わるなど2件みられる。なかでも、万治2年の大火前から北三ノ丸のNS-4に存続していた御鷹部屋は無くなっている。

3. 武家屋敷地の変遷

以上、述べてきた慶長18年～慶応までの二ノ丸と三ノ丸、西外郭の各区画における屋敷割と屋敷替え、空き地の件数を表2に示した。また、区画別の件数をまとめたものが表3である。

3-1. 屋敷割

表2・3のように、慶長18年にみられた二ノ丸と三ノ丸、西外郭の屋敷地の総数は18筆である。慶長期の18筆は万治2年の大火前までに15筆に減少し、さらに万治2年の大火後～安永4年にかけては15～16筆で推移している。屋敷数は文化8年に一旦13筆に減るが、慶応には再び2筆増加して15筆に戻っている。

区画別にみると、慶長18年の二ノ丸の屋敷地は北二ノ丸が2筆、東二ノ丸が1筆みられる。その後、北二ノ丸は万治2年の大火前までに分筆が1件、寛文9年の大火後～貞享2年にかけて合筆が1件ある。一方、東二ノ丸は江戸時代を通して合筆や分筆はなく、慶長期の状態がそのまま幕末まで続いている。

慶長18年の三ノ丸の屋敷地13筆は、南三ノ丸に1筆、西三ノ丸に6筆、北三ノ丸に6筆ある。西三ノ丸の6筆は、慶長18年～万治2年の大火前までに3筆が合筆されたため半減し、延宝4年の御座所新設にともない屋敷割に変化がみられる。北三ノ丸の6筆は、万治2年の大火後～寛文9年の大火前にかけて合筆と分筆があり7筆に増えている。その後は貞享2年までに8筆に増えるが、安永4年～文化8年にかけて再び6筆に戻っている。これ以後、慶応までに泉蔵院と御鷹部屋がそれぞれ分筆して8筆に増加している。また、南三ノ丸の1筆は慶長18年～慶応まで屋敷割に変化はみられない。この他、西外郭の屋敷割をみると、慶長18年の2筆が万治2年の大火前までに合筆して1筆になり、その後は慶応まで変わっていない。

表2 各時代の屋敷割と屋敷替え、空き地の件数（二ノ丸・三ノ丸・西外郭）

単位：筆

区画	年代		慶長18年 (1613)	万治 2 年 (1659)	寛文年間 (1661～72)	貞享 2 年 (1685)	正徳 4 年 (1714)	安永 4 年 (1775)	文化 8 年 (1811)	慶応年間 (1865～67)
	屋敷地数									
北二ノ丸	屋敷割	合筆		0	0	1	0	0	0	0
		分筆		1	0	0	0	0	0	0
	屋敷数		2 (1)	3 (0)	3 (1)	2 (0)	2 (0)	2 (0)	2 (0)	2 (0)
	屋敷替え		0	3	1	2	0	0	0	0
	変化なし			0	2	0	1	0	0	0
	空き地		0	0	0	0	1	2	2	2

東二ノ丸	屋敷割	合筆		0	0	0	0	0	0	0
		分筆		0	0	0	0	0	0	0
	屋敷数		1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)
	屋敷替え		0	0	0	1	0	0	0	1
	変化なし			0	0	0	0	0	0	0
	空き地		0	1	1	0	0	1	1	0

南三ノ丸	屋敷割	合筆		0	0	0	0	0	0	0
		分筆		0	0	0	0	0	0	0
	屋敷数		1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)
	屋敷替え		0	1	0	1	1	1	1	1
	変化なし			0	1	0	0	0	0	0
	空き地		0	0	0	0	0	0	0	0

西三ノ丸	屋敷割	合筆		2	0	1	0	0	0	0
		分筆		0	0	0	0	0	0	0
	屋敷数		6(6)	3(2)	3(2)	2(1)	2(1)	2(1)	2(1)	2(0)
	屋敷替え		0	3	1	2	1	1	0	0
	変化なし			0	2	0	0	1	2	0
	空き地		0	0	0	0	0	0	0	0

北三ノ丸	屋敷割	合筆		1	0	0	0	0	2	0
		分筆		1	1	2	0	0	0	4
	屋敷数		6(6)	6(5)	7(5)	8(4)	8(3)	8(3)	6(1)	8(1)
	屋敷替え		0	6	1	7	4	2	2	1
	変化なし			0	5	1	4	5	2	3
	空き地		0	0	1	0	0	1	2	4

西外郭	屋敷割	合筆		1	0	0	0	0	0	0
		分筆		0	0	0	0	0	0	0
	屋敷数		2(0)	1(1)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)
	屋敷替え		0	1	0	1	1	1	0	1
	変化なし			0	0	0	0	0	0	0
	空き地		0	0	1	0	0	0	1	0

*1:総数の()内は、武家屋敷地の数。*2:付紙が剥がれた屋敷地は空き地に含む。

*3:付紙が剥がれた屋敷地からの変化は空き地に含めた。

表3 二ノ丸と三ノ丸、西外郭における屋敷割と屋敷替え、空き地の総数

単位：筆

区画	年代		慶長18年 (1613)	万治2年 (1659)	寛文年間 (1661~72)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865~67)
	屋敷地数									
二ノ丸	屋敷割	合筆		0	0	1	0	0	0	0
		分筆		1	0	0	0	0	0	0
	屋敷地数		3(1)	4(0)	4(1)	3(0)	3(0)	3(0)	3(0)	3(0)
	屋敷替え		0	3	1	3	0	0	0	1
	空き地		0	1	1	0	1	3	3	2
三ノ丸	屋敷割	合筆		3	0	1	0	0	2	0
		分筆		1	1	2	0	0	0	4
	屋敷地数		13(13)	10(8)	11(8)	11(6)	11(5)	11(5)	9(3)	11(3)
	屋敷替え		0	10	2	10	6	4	3	2
	空き地		0	0	1	0	0	1	2	4
西外郭	屋敷割	合筆		1	0	0	0	0	0	0
		分筆		0	0	0	0	0	0	0
	屋敷地数		2(0)	1(1)	1(1)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)
	屋敷替え		0	1	0	1	1	1	0	1
	空き地		0	0	1	0	0	0	1	0
全区画	屋敷地：総数		18(14)	15(9)	16(10)	15(6)	15(5)	15(5)	13(3)	15(2)
	屋敷替え		0	14	3	14	7	5	3	4

*1:総数の()内は、武家屋敷地の数。*2:付紙が剥がれた屋敷地は空き地を含む。

*3:付紙が剥がれた屋敷地からの変化は空き地に含めた。

3-2. 屋敷替え

表3をみると、屋敷替えが最も多い時期は慶長18年～万治2年の大火前までと、寛文9年の大火後～貞享2年までで、ともに14件ずつみられる。

前者は前述したように、慶長期に城代を務めた本多七左衛門は寛永元年に仙千代に伴って越後高田へ移っており、忠昌の弟直政は同17年に出雲松江に転封している。これに対して、毛受小三郎や大谷助六、大関助左衛門らは忠昌とともに越後高田から福井へ移住している。また、慶長18年の絵図にみられる杉浦六右衛門や小栗美作、小栗忠八などの名前は忠昌時代の給帳にはなく、逆に万治2年の大火前の絵図にある酒井与三左衛門や毛受小三郎、加藤内膳などの名前は忠昌以降の給帳で確認できる¹⁶⁾。したがって、寛永元年に忠昌が3代藩主となった際に藩士も一新され、大規模な屋敷替えがこの時期に行われたため、二ノ丸と三ノ丸、西外郭もその影響を受けたと思われる。

一方、後者はこの期間に寛文の大火があり、福井城下の武家屋敷地は大きく変わったためである。この三区画も同様に、本丸の建物を守るために北二ノ丸一帯が花畠や御茶屋になったのをはじめ、土居ノ内にあった東照宮が北三ノ丸に移築されている。また、延宝4年には慶長18年以降、常に武家屋敷地であった西三ノ丸の一面に御座所が新設されている。その後、屋敷替えは正徳4年～文化8年の間に3～5件、慶応までに4件みられるが、そのほとんどが武家同士の転居や作事所の移転である。このように、貞享2年以降の二ノ丸の武家屋敷地はすべて花畠や空き地に替わり、三ノ丸と西外郭の大半を藩役所や御座所のほか、東照宮や仏殿などが占めるようになる。この状況は幕末にかけて徐々に多くなり、慶応の武家屋敷地は三区画で僅か2筆に過ぎない。

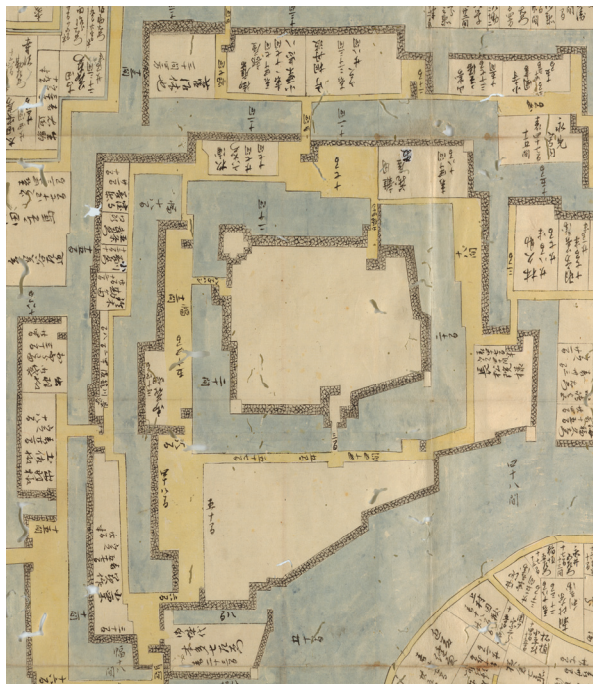
4. おわりに

以上、二ノ丸と三ノ丸、西外郭における武家屋敷地の変遷を検討した結果、以下のことが指摘できる。

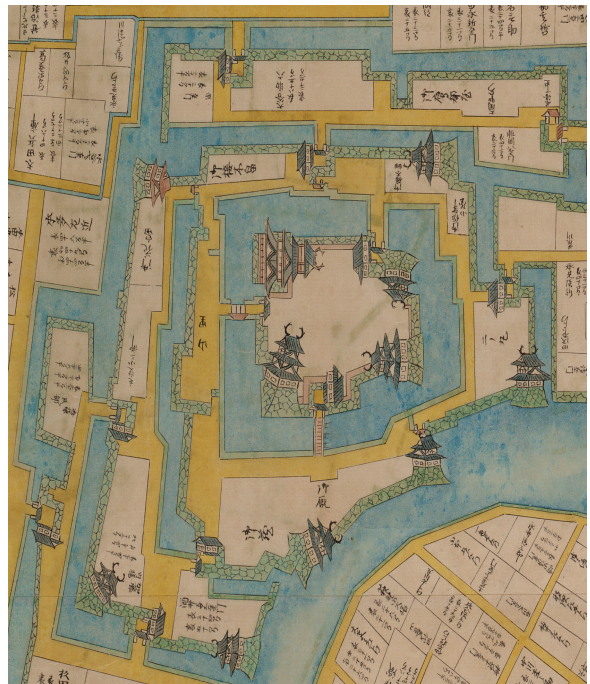
- 1) 二ノ丸と西外郭の屋敷割は慶長 18 年～慶応までほとんど変化していないが、三ノ丸は慶長 18 年～万治 2 年の大火前の間と寛文 9 年の大火後～貞享 2 年の間に 2 度大きく変わっている。なかでも北三ノ丸の変化が激しく、江戸時代を通して合筆と分筆が繰り返されている。
- 2) 屋敷替えは三区画とも寛永元年の忠昌入部の際と寛文 9 年の大火直後に大きな変化がみられる。その後、貞享 2 年～幕末にかけても屋敷替えは頻繁にあるが、特に北三ノ丸は各時期に多くの居住者が入れ替わっている。
- 3) 江戸時代初期には 14 筆あった武家屋敷地は時代とともに減少して、幕末に至っては武家屋敷地の大半を城地が占めるようになる。

【註】

- 1) 8 枚の城下絵図はすべて、松平宗紀氏所蔵『松平文庫』 福井県立図書館保管
- 2) 拙稿「南三ノ丸地区における武家屋敷地の変遷」日本建築学会北陸支部研究報告集 50 号, pp. 329-332, 2007. 7
および「東三ノ丸における武家屋敷地の変遷」同 51 号, pp. 475-478, 2008. 7
- 3) 寛文 9 年(1669)に城下の大部分を焼き尽くす大火があり、天守をはじめとする城郭内のほとんどの建物が焼失した。
- 4) 貞享 3 年(1686)に福井藩は 47 万 5000 石から、25 万石に半減された。その際、1000 人余りの藩士が禄を失い、城東一帯や足羽川南岸の毛矢町など武家屋敷地の多くは空き地となっている。
- 5) 文久 2 年(1862)に大名妻子も国元居住が可能になり、16 代藩主慶永は翌 3 年に正室の勇姫を福井へ移住させた。これに伴って造営されたのが三ノ丸屋形である。
- 6) 元和 9 年(1623)に 2 代藩主忠直は幕府の命によって豊後に配流となり、翌寛永元年(1624)に秀康の次男である忠昌が越後高田から転封して福井藩を継いでいる。
- 7) 前掲 2、「南三ノ丸地区における武家屋敷地の変遷」では下馬門の外側の下馬門前と漆門内を南三ノ丸地区と呼んだが、今後南三ノ丸とは下馬門の内側を指し、これまでの下馬門前と漆門内は南外郭とする。
- 8) 図 1 にみられる各屋敷地の大きさと形状に関しては、やや正確性に欠けている。
- 9) 寛永元年(1624)に 2 代藩主忠直の長男仙千代(光長)は忠昌の旧領の高田へ移っている。『稿本福井市史(上)』福井市役所 歴史図書社, p. 152, 1973. 1
- 10) 前掲 9、『稿本福井市史(上)』, p. 153, 出羽守直政の項
- 11) 『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』福井市, 1989. 3 や舟沢茂樹『福井城下ものがたり』福井 PR センター, 1977. 4、松原信之『若越城下町古図集』古今書院, 1957. 7 などを参考にしている。
- 12) 前掲 9、p. 158, 忠昌の薨去 殉死者の項
- 13) 註 11 と同じ
- 14) 前掲 9、p. 172 に「御座所の造営は、光通薨去して五代昌親の時、延寶三年二月起工し、同年閏四月二十日竣工したり、(後略)」とある。
- 15) 豊姫は 7 代吉品(5 代昌親再勤)の女子で延宝 8 年(1680)に生まれ、正徳 5 年(1715)に京都に嫁いでいる。
- 16) 松平宗紀氏所蔵『松平文庫』福井県立図書館保管、『源秀康公御家中給帳』、『隆芳院様(忠昌)御代給帳』、『大安院様御代給帳』などを参考にしている。『福井市史 資料編 4 近世二』福井市, pp. 202-384, 1999 所収



1. 慶長 18 年以前(～1613)
(1309. 『北之庄城郭図』)



2. 万治 2 年大火前(1659)
(1315. 『御城下之図』明治期複製)



3. 寛文 9 年大火前(1669)
(1319. 『御城下絵図』)



4. 貞享 2 年(1685)
(1320. 『福居御城下絵図』)
(城下絵図はすべて『松平文庫』より)

図 4 城下絵図にみる二ノ丸と三ノ丸、西外郭の武家屋敷地(1)



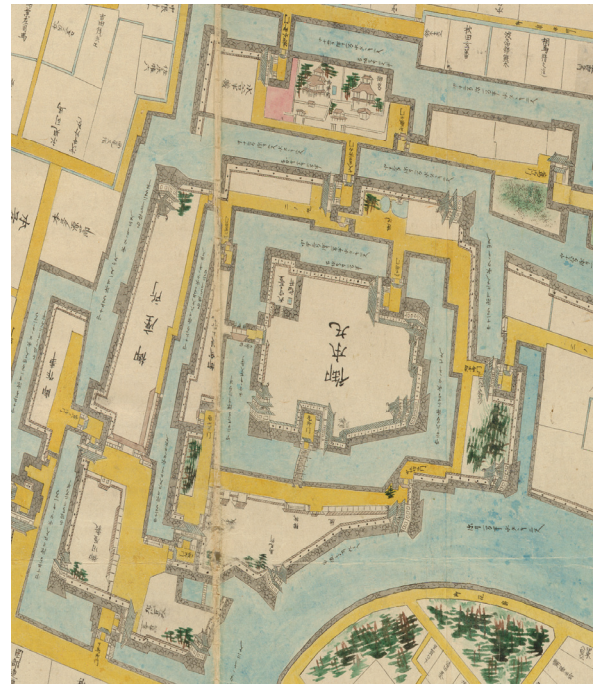
5. 正徳4年(1714)
(1325.『御城下之絵図』)



6. 安永4年(1775)
(1336.『御城下之絵図』)



7. 文化8年(1811)
(1340.『福井分間之図』)



8. 慶応年間(1865～67)
(1342.『御城下之図』明治14年復原)
(城下絵図はすべて『松平文庫』より)

*:各絵図の下段、左隅の番号(4ヶ)は、所蔵機関『松平文庫』の記号である。

図4 城下絵図にみる二ノ丸と三ノ丸、西外郭の武家屋敷地(2)

(平成21年3月31日受理)